

2. 合流式下水道の問題点

合流式下水道は、污水管と雨水管を兼用するため、建設費を抑えることができ、浸水対策にも効果があることから、これまでに全国 191 都市で採用されて整備されてきました。

しかし、『合流式』は、台風やゲリラ豪雨などの大雨時に、污水とともに大量の雨水が下水道管を通じて処理場に流れ込むことから、大量の流入が続くと、一部の処理水が簡易処理となり河川へ放流されるため、処理水の汚濁負荷量が晴天時に比べ一時的に大きくなります。

また、大雨時に下水処理場へ処理能力以上の雨水が流れこむのを緩和するため、雨水吐き室といわれる地下施設に、堰（せき）を設け処理場へ流れる雨水量を調整しています。

その際に雨水とともに污水やゴミ・厨芥類（ちゅうかいりい）等が、堰を越流して処理されないまま、河川に放流されることから、河川や海などの公共用水域の汚濁や公衆衛生上の問題が全国的に指摘されています。

合流式下水道のしくみ（大雨のとき）

